

『三国志演義』二十四卷系後期刊本諸本について

中川 諭

—

周知のとおり、『三国志演義』の版本は世界各地に数多く現存している。筆者は以前、『三国志演義』諸本は大きく三つの系統に分けられることを論じた。⁽¹⁾ その中で、文章の描写が比較的豊富で、ある程度歴史書の影響を受けている諸本を「二十四卷系諸本」と名付けた。この二十四卷系に属する版本は嘉靖元年に刊行されたとされる嘉靖本『三国志通俗演義』をはじめとして、万暦年間から明末清初の時期に次々と出版された。

万暦年間に『李卓吾先生批評三国志』（以降、『李卓吾先生批評三国志』と題する版本を総称して「李卓吾本」と称する）が現れた後も、嘉靖本や周日校本などのような二十四卷系の文章を継承した版本がいくつか出版された。ここで李卓吾本成立以降に現れた二十四卷系の版本を「『三国志演義』二十四卷系後期諸本」と呼ぶこととしたい。すなわち鍾伯敬本・英雄譜本・遺香堂本・李漁本の四本である。この数年来、『三国志演義』版本についての新資料が次々と発見された。また版本のデジタルデータ化（テキストデータ化・画像データ化）が積極的に行われたり、世界各地の図書館・蔵書機関がインターネット上で貴重資料の画像データを公開するようになったりしてきた。このように、版本研究の環境は、以前に比べて大きく進展して

きた。こうした状況のもと、筆者は二十四巻系後期諸本各本のうち、英雄譜本・遺香堂本・李漁本の各本について詳細に検討を行い、同版異版の判定、同版の本の印刷の先後、そして本文の特徴について考察した。では現存する鍾伯敬本の同版・異版について、また印刷の先後についての問題はいかがであろうか。また鍾伯敬本以下、四種類の子四巻系後期諸本は相互にどのような関係にあるのであろうか。そして周日校本など刊行年の比較的早い二十四巻系の版本とはどのような関わりがあるのであろうか。本稿は、二十四巻系後期諸本をめぐるこれらの問題について考えていこうとするものである。

二

まず、鍾伯敬本について論ずる。鍾伯敬本の正式な書名は『鍾伯敬先生批評三国志』である。第一巻巻頭には、「景陵鍾伯敬父批評／長洲陳仁錫明卿較閱」と題する。序文・目録などは逸する。本文の版式は、半葉十二行行二十六字、框郭上部に眉批がある。東京大学東洋文化研究所、天理図書館蔵。

鍾伯敬本は国内二つの機関に蔵されている。ではこの二本は同版なのであろうか、それとも異版なのであろうか。また印刷はどちらが早いのであろうか。

東大本と天理本を比べてみると、次のような例が見られる。巻二第三十八葉b面で、二本とも第十二行「以」字から割れ目が見える。この割れ目の位置は両本で一致しており、よって東大本と天理本は同版であると判断できる。しかし両本の割れ目をさらに細かく見てみると、東大本の第三行「州」字は割れているが、天理本は割れていない。このことから、印刷の順序は、天理本の方が東大本よりも早いと言えよう。

それでは、鍾伯敬本の底本はどのような版本なのであろうか。筆者はかつて鍾伯敬本の底本は呉観明本で

大宛 以雪大宛玄德帝室之冑才德兼全特遣書來慰我天下之重即
大宛 日班師回守畧此以開別圖後會
大宛 曹操援寨皆起且說來使回徐州入城見謙呈上書劄言曹操兵退
大宛 謙大喜差人勿投請孔融田楷雲長等軍赴城大會眾官軍屯城外
大宛 將入赴席謙命請玄德于高座玄德再三辭讓酒至數巡謙曰老夫
大宛 年邁精力衰乏二子不肖不堪國家重任劉玄德帝室之冑德廣才
大宛 高可領徐州老夫乞開養病玄德曰孔文舉令備來救援徐州以義
大宛 之故今却據守人不知者以為大不義也糜竺曰今漢室陵遲海宇
大宛 傾覆樹功立業正在此時徐州殷富戶口百萬使君領此不可辭也
大宛 玄德曰此事決不敢當陳登進曰閣下君多病不能督事明公勿辭
大宛 曰袁公路驕奢非治亂之主今以徐州軍兵馬步十萬上可以匡君

天理本 卷二 第三十八葉 b面

大宛 以雪大宛玄德帝室之冑才德兼全特遣書來慰我天下之重即
大宛 日班師回守畧此以開別圖後會
大宛 曹操援寨皆起且說來使回徐州入城見謙呈上書劄言曹操兵退
大宛 謙大喜差人勿投請孔融田楷雲長等軍赴城大會眾官軍屯城外
大宛 將入赴席謙命請玄德于高座玄德再三辭讓酒至數巡謙曰老夫
大宛 年邁精力衰乏二子不肖不堪國家重任劉玄德帝室之冑德廣才
大宛 高可領徐州老夫乞開養病玄德曰孔文舉令備來救援徐州以義
大宛 之故今却據守人不知者以為大不義也糜竺曰今漢室陵遲海宇
大宛 傾覆樹功立業正在此時徐州殷富戶口百萬使君領此不可辭也
大宛 玄德曰此事決不敢當陳登進曰閣下君多病不能督事明公勿辭
大宛 曰袁公路驕奢非治亂之主今以徐州軍兵馬步十萬上可以匡君

東大本 卷二 第三十八葉 b面

あると述べ、その根拠とし
 て、第九十回「諸葛亮七擒
 孟獲」の中の一節では呉
 観明本は「頭戴日月狼鬚
 帽」と作っているところを
 緑蔭堂本（すなわち李卓吾
 乙本）と藜光楼本（すなわ
 ち李卓吾丙本）いづれも
 「頭戴日月狼鬚帽」と正し
 くなっているが、鍾伯敬本
 の同じ箇所は呉観明本と同
 様に「頭戴日月狼鬚帽」と
 誤っていることを挙げた。
 そして次のように述べた。³⁾

鍾伯敬本が基づいた李
 卓吾本は、この個所の
 「鬚」の字を「鬚」字に
 誤っていたということ

であろう。そしてそれは呉観明本である可能性は極めて高いのではないだろうか。

これ以外にも、鍾伯敬本の底本が呉観明本であることを示す例がいくつかある。次の例を見てみよう。

(台：台湾国家図書館蔵本、呉：呉観明本、乙：李卓吾乙本、丙：李卓吾丙本、丁：李卓吾丁本)

鍾伯敬本卷十「張永年反難楊修」

台：松全懼怯之意

呉：松全無懼怯之意

乙：松全無怯之意

丙：松全無怯之意

丁：松全無懼怯之意

鍾：松全無懼怯之意

張松が曹操の陣営にやって来て、曹操が張松に対して自らの軍隊を自慢するが、張松は「我が蜀の国は仁義でもって国を定めています」と述べる。曹操は厳しい顔つきになるが、張松は恐れることもなく、曹操を見下す。この例で、台湾本には「無」字がなく、文意が通じない。呉観明本には「無」字があり、正しい文になっている。しかし呉観明本の該当部分を見ると、「全」字は小さく、「松」字と「無」字の間に無理矢理挿入したようになっていて、本来行二十二字であるはずなのに、この行だけ行二十三字になっているのである。これは呉観明本が台湾本の誤りを修正した結果であろう。乙本・丙本は文意を正しくし、かつ行二十二

字にするために、「無」字を挿入する代わりに「懼」字を削除している。丁本は文意を正しくしかつ一行の文字数を揃えるために、「全」字を削除している。さて鍾伯敬本を見ると、文字は呉観明本と完全に一致している。そして鍾伯敬本は李卓吾本と版式が異なるため、呉観明本のように一文字無理矢理挿入したようにはなっていない。この例は鍾伯敬本が呉観明本を直接の底本にしていることを示しているように。

拙著にて挙げた例とここに示した例から、鍾伯敬本の底本は呉観明本で間違いあるまい。

三

続いて、二十四卷系後期諸本各本の相互の関係について考えてみよう。

遺香堂本の底本について、筆者は以下のように論じた。⁹⁾

遺香堂本の文章は基本的には甲本（台湾本・呉観明本）とほぼ同じになっているが、しかし甲本の文字に誤りがある場合は、遺香堂本の文字は乙本・丙本と同じになっている。また甲本と乙本・丙本で文字が異なりかつどちらでも文意が通じる場合には、遺香堂本の文字は甲本に一致する。（中略）このように文字の異同からすると、遺香堂本の底本は李卓吾甲本の中の一本であろうと考えられる。

しかしその実、遺香堂本の直接の底本はいわゆる「遺香堂祖本」¹⁰⁾である。遺香堂祖本の底本が李卓吾甲本である（そのうち、呉観明本で間違いあるまい）。

英雄譜本の文章は、大部分は二十四卷系のものであるが、一部二十卷「花関索」系（二十卷繁本系『三国

志伝⁽¹⁾の文章が混入している。そして二十四卷系の文章のところは、李卓吾本の中の呉観明本であると述べた。英雄譜本の底本はやはり呉観明本である。

李漁本の文章は、一部毛宗崗本の文章を使ったり独自に修正したりしているところもあるが、基本的には遺香堂祖本と非常に近い。李漁本の主たる底本は、遺香堂祖本である。⁽¹³⁾

以上のことから二十四卷系後期諸本の底本を整理すると、次のようになる。

鍾伯敬本・呉観明本

遺香堂(祖)本・呉観明本

英雄譜本(『三國志演義』二十四卷系文章部分)・呉観明本

李漁本・遺香堂祖本

李漁本以外の三種類の版本は、みな呉観明本と密接な関係にあるようだ。

しかしこれは二十四卷系後期諸本各本と李卓吾本諸本とを比較した結果であり、二十四卷系後期諸本各本相互を比較した結果ではない。そこで一つ問題が生じる。李漁本を除く三本は、それぞれが直接呉観明本を底本にしているのだろうか。それとも三本どうしで相互に継承関係にあるのだろうか。続いてはこの問題について考えてみたい。

最初の例は、劉備が初めて登場した場面で、劉備の幼い頃のエピソードを紹介している部分である。

呉観明本第一回「祭天地桃園結義」

鍾伯敬本第一回「祭天地桃園結義」
 遺香堂本第一回「祭天地桃園結義」
 英雄譜本第一回「祭天地桃園結義」
 鄭少垣本卷一「祭天地桃園結義」

吳觀明本	鍾伯敬本	遺香堂本	英雄譜本	鄭少垣本
備 早 喪父、 事母至孝。家寒、 販履織蓆爲業。 舍 東南角 上、有一 桑樹、高五丈餘、 望見童童 如 遥 小車蓋。往來者 皆言、此樹非凡。	備 早 喪父、 事母至孝。家寒、 販履織蓆爲業。 舍 東南角 上、有一 桑樹、高五丈餘、 望見 重重如 小車蓋。往來者 皆言、此樹非凡。	備 早 喪父、 事母至孝。家寒、 販履織蓆爲業。 舍 東南角 上、有一 桑樹、高五丈餘、 望見童童 如 遥 小車蓋。往來者 皆言、此樹非凡。	弘 蚤喪、玄德 事母至孝。家寒、 無可 養膳、以 販履織蓆爲業。玄 德 住処東南角 上、有一株大 桑樹、高五丈餘、 枝葉茂盛、遠近 望見 重重如 車蓋。往來 之 人皆言、此樹非凡。	弘 早 喪、玄德 事母至孝。家寒、 無 菅供 膳、 販履織蓆爲業。玄 德 住處東南角離 内、有一株大 桑樹、高五丈餘、 枝葉茂盛、遠近 通望見 重重如 車蓋。往來 之 人皆言、此樹非凡。

この例を見ると、吳觀明本・鍾伯敬本・遺香堂本の文章は完全に一致しておりわずかに異体字の違いが見られるだけである。英雄譜本については、いくつか違いが見られる。たとえば、吳觀明本など三本が「舍東南」となっているところを、英雄譜本は「玄德住処東南」となっている。また英雄譜本には「無可養膳以」・「枝葉茂盛遠近」の文字があるが、吳觀明本など三本にはいずれも見られない。そして英雄譜本の文章は、鄭少垣本に近い。これはむしろ当然で、英雄譜本のこの部分は二十卷「花関索」系統の文章が紛れ込んでいるところである。⁽¹⁵⁾ 一方吳觀明本など三本は全体にわたって二十四卷系の文章であり、途中で他の系統

の文章が混じることはない。よって英雄譜本は、鍾伯敬本や遺香堂本の底本となり得ることはない。

二つ目の例。博望坡の戦いで夏侯惇は諸葛孔明の計略によって打ち負かされ、許昌へ逃げ帰っていった。曹操はその知らせを聞いて、五十万の大軍を派遣しよう命令を下した。

呉観明本第四十回「獻荊州王粲説劉琮」

鍾伯敬本第四十回「獻荊州王粲説劉琮」

遺香堂本第四十回「獻荊州王粲説劉琮」

英雄譜本第七十九回「獻荊州王粲説劉琮」

呉観明本	鍾伯敬本	遺香堂本	英雄譜本
曹仁・曹洪爲先鋒、張遼・張郃爲第三隊、夏侯惇・夏侯淵爲第三隊、于禁・李典爲第四隊。	曹仁・曹洪爲先鋒、張遼・張郃爲第三隊、于禁、李典爲第四隊。	曹仁・曹洪爲先鋒、張遼・張郃爲第二隊、夏侯惇・夏侯淵爲第三隊、于禁・李典爲第四隊。	曹仁・曹洪爲先鋒、張遼・張郃爲第二隊、夏侯惇・夏侯淵爲第三隊、于禁・李典爲第四隊。

この例では、鍾伯敬本のみ「爲第二隊夏侯惇夏侯淵」の文字が脱落している。これは恐らく、二度出てくる「爲第二(三)隊」を混同した同詞脱文であり、鍾伯敬本における誤りであろう。その他の本にはこの脱落はない。よって鍾伯敬本は英雄譜本と遺香堂本の底本にはなり得ないことになる。

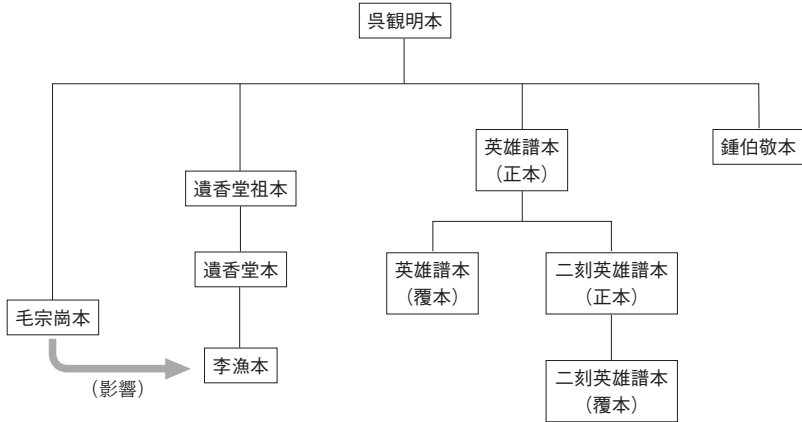
三つ目の例。董卓は少帝等を殺害した後、ますます権勢をほしいままにしていた。常に軍を率いて城外へ出かけていたが、ある時陽城へとやって来た。

- 呉観明本第四回「廢漢帝董卓弄權」
- 鍾伯敬本第四回「廢漢帝董卓弄權」
- 遺香堂本第四回「廢漢帝董卓弄權」
- 英雄譜本第七回「廢漢帝董卓弄權」

呉観明本	鍾伯敬本	遺香堂本	英雄譜本
時當二月、村民社賽 男女皆集、引軍圍住、 盡皆殺之、掠 婦女財物、收萬千餘 件、都裝在車上、懸頭 千餘顆於車下連軫還 都、先報董卓尉殺賊大 勝而回。	時當二月、村民社賽 男女皆集、引軍圍住、 盡皆殺之、掠 婦女財物、收萬千餘 件、都裝在車上、懸頭 千餘顆於車下連軫還 都、先報董卓尉殺賊大 勝而回。	時當二月、村民社賽 男女皆集、引軍圍住、 盡皆殺之、擄掠 婦女財物、 裝在車上、懸頭 車下連軫還 都、先報 太尉殺賊大 勝而回。	時當二月、村民社賽 男女皆集、卓引軍圍住、 將男子 皆殺之、掠 其婦女財物、收萬千餘 件、都裝在車上、懸頭 千餘顆於車下連軫還 都、先報董卓尉殺賊大 勝而回。

この例を見ると、呉観明本・鍾伯敬本・英雄譜本の三本にはみな「收萬千餘件都」・「千餘顆於」の文字が見られるが、遺香堂本にはない。この数文字が無いことで特に文意に影響はなく、文章が多少簡略化されるだけである。これは恐らく遺香堂本による改変であろう。この例からすると、遺香堂本は鍾伯敬本・英雄譜本の底本とはなり得ないことになる。

以上の三つの例から、鍾伯敬本・遺香堂本・英雄譜本は、相互に底本となり得ることはないことが分かる。だとすると、この三本は呉観明本を直接の底本としているのであり、すなわち呉観明本こそ鍾伯敬本・遺香堂（祖）本・英雄譜本（二十四卷系の文章部分）の共通する底本だということである。呉観明本以降明末清初に出版された『三国志演義』各本の状況を図に示すと、次のようになろう。



この図から、呉観明本を起点として数多くの『三国志演義』の重要な版本が派生していることが分かる。これは、呉観明本が明末以降の『三国志演義』版本の成立と出版に対して大きな影響を持っていたということを意味している。呉観明本の存在は特に重要視するべきであると考えられる。

四

以上、二十四卷系後期諸本の相互関係について論じてきた。二十四卷系後期諸本には四種類の版本があるが、そのうち鍾伯敬本・英雄譜本・遺香堂(祖)本は李卓吾本の一つである呉観明本を直接の底本として成立したものである。言い換えれば、明末清初の時期に呉観明本は多くの『三国志演義』の版本を生み出したのである。明末清初の時期における『三国志演義』版本の成立と出版について考える時、呉観明本は決して軽視してはいけな、極めて重要な版本なのである。

以前拙著で論じたように、『三国志演義』の版本は大

きく三つの系統に分けることができる。呉観明本はそのうちの二十四卷系諸本に分類される版本である。二十四卷系に属する版本が出版される一方で、二十卷「花関索」系（繁本系統）と二十卷「関索」系（簡本系統）に属する版本も、引き続き出版されていた。中でも簡本系統の『三国英雄志伝』と題する版本（拙著では二十卷「関索」系の「英雄志伝」グループと称する）は、明末から清代の中後期に至るまで、途切れることなく出版され続けていた。では明末以降影響力を持っていた呉観明本と二十卷系の諸版本とはどのような関係にあるのだろうか。さらに探っていく必要がある。

近年、多くの新資料が発見されたり、これまで閲覧が難しかった資料がインターネット上で容易に見られるようになったりしてきた。こうした資料を考慮すると、拙著で論じた結論は、必ずしも十分ではなくなってきたつある。こうした新資料を踏まえてさらに検討を深めることによって、明末から清代にかけての『三国志演義』版本の出版状況がより明らかになっていくことだろう。

注

- (1) 中川論著、『三国志演義』版本の研究』汲古書院、一九九八年。
- (2) 『新刊校正古本大字音釈三国志通俗演義』十二卷。周日校仁寿堂刊。いわゆる「周日校本」は甲本・乙本・丙本の別があり、それぞれわずかに文章・文字が異なる。甲本・乙本は周日校自身の刊行であろうが、丙本は福建建陽の書肆による翻刻の可能性が高い。甲本は万曆十五年（一五八七年）の、乙本は万曆十九年（一五九一年）の刊行である。丙本の刊行年は不明であるが、万曆十九年からそれほど経たない時期であろう。
- (3) 鍾伯敬先生批評三国志』二十卷。
- (4) 『精鑄合刻三国水滸全伝』二十卷。本文の上三分の一が『水滸伝』、下三分の二が『三国志演義』となっている。原刻のいわゆる「英雄譜」とその翻刻である「二刻英雄譜」とがある。中川論『精鑄合刻三国水滸全伝』の『三国志演義』、『中国古典小説研究』第22号、二〇一九年予定）参照。

- (5) 『三国志』二十卷。遺香堂刊。中川論「遺香堂本『三国志』について」(二〇一六年第十五届中国古代小説・戯曲文献暨デジタル国際研討会発表論文、二〇一六・八) 参照。
- (6) 『季笠翁批閱三国志』二百二十回。中川論「季笠翁批閱三国志」再考」(『三国志研究』第十三号、三国志学会、二〇一八年) 参照。
- (7) この例は小川環樹先生がかつて「関索の伝説そのほか」の中で、江戸時代の『三国志演義』の日本語訳『通俗三国志』の底本が呉観明本であることを証明するのに挙げられた個所である。
- (8) 注1前掲拙著第二章第六節。
- (9) 注5前掲拙論。
- (10) 張青松氏個人所蔵の版本で、版式は遺香堂本に等しい。文章や批評も遺香堂本とほぼ一致するが、ごく一部異なるところがある。刊行書肆名などは不明。
- (11) 注1前掲拙著第二章第七節。
- (12) 注4前掲拙論。
- (13) 注6前掲拙論。
- (14) 『新鐔京本校正通俗演義按鑑三国志伝』二十卷。英雄譜本の二十卷繁本系の文章は、鄭少垣本に最も近い。注1前掲拙著第二章第七節参照。
- (15) 注1前掲拙著第二章第七節。
- (16) 本来遺香堂祖本を用いるべきところであるが、遺香堂祖本は残本であり、ここに示す部分は残っていない。よって便宜上遺香堂本を用いる。

(二〇一八年十一月二十一日受理、二〇一八年十二月十日採択)